

# 家族と農業経営

3回  
シリーズ

## 第1回 家族経営協定って何？



最近とか取り沙汰されている「家族経営協定」。家族経営が基本の業種は、ほかにもワンサカあるのに、農業をやっているだけで、夫婦や家族の問題に、なぜ行政が立ち入ってくるのだろう？ 農家の女性の地位は本当に低いのか？ 「女だからの経営論」の取材をベースに考えていきたい。

三好 かやの

### ●家族だから明確に

家族経営協定——私が初めてこの言葉を聞いたのは1996年。生まれて初めて「女経営論」の取材をしたときのこと。農業はおろか、農家の女性の生活についてもロクに知らなかった。

そんな私の記念すべき取材第1号となったのは、当時50代のAさん。既に「家族経営協定」を結んで、夫婦の役割分担、報酬金額、休日などを定めて実行していた。「家族だから曖昧にするんじゃない、家族だから明確にしておくべきなんです」と、きっぱり語る口調に迷いはなかった。ほ、農家の女性にとって家族経営協定は、なくてはならないものなんだなあ。いいこと聞いたぞ。第一印象はそんな感じだった。

### ●じいちゃんの口座で充分

ところが、次なる取材先のキャベツ農家のBさん（20代後半）曰く、「家族経営協定？ そんなの知らない。うちはいちちゃんの農協の通帳ひとつあれば充分だから」といっているのである。この違いは何なんだ？？？取材2件目にして早くも混乱する三好。同じ農家で、なぜこんなに違うんだ？

Aさんの場合、結婚当初から経営が困難を極めた上、ほどなく子どもが誕生。いろいろ事情があつて夫の両親の財布はあてに

できない。Aさんはハウスの隅に菜つ葉の種を播き、その売上げでミルクや産着を買ったという。

同じ家に暮らしていても、妻や嫁は自分の自由にできるお金がない。そんな時期が長く続いたのが、家族経営協定の生まれる大きな原因だという。第一、お嫁さんが舅や姑から手渡される現金を「小遣い」と呼ぶのもなんかヘンだ。子どもじゃあるまいし。毎日ちゃんと働いているのだから、正當な「報酬」を決めて支払うべきという考えは、正論に思える。

すると「じいちゃんの通帳ひとつで充分」と明るく笑っていたBさんは、遅れているのか？当初2人の違いは、時代背景や世代の違いにあるのだと思っていた。けれどよくよく考えてみると、本質的な違いは彼女たちをとりまく「家族」にあると思えてきた。Bさんには、じいちゃん名義の口座から、必要なだけの現金を下ろして、子どものパンツや靴下を買う自由とか制限がある。またダンナもその両親も、彼女を信頼している。家族なんだからそれくらい当たり前じゃないか？

だつて都会の専業主婦の奥さんは、ダンナ名義の口座からガンガンお金を下ろして、ブランド品のバックなんか買っていたりするんだぞ。それでも第三者の立会いの元に、夫と協定結んでいるなんて聞いたことがない……。

協定を結ばなくても家計も経営もちゃん

と回している家もある。農家の奥さんとその家族が、みんなBさんみたいだったら、わざわざ協定を結ぶ必要はないのかもしれない。その一方で、Aさんのように、農家の一員としてどこか満たされない思いを原動力に働き続けて、協定締結に漕ぎ付けた人もいる。うーん、そもそも家族経営協定って何なんだ？

「農家に家族間の協定を」という動きは、昭和30年代からあったようだ。農水省や全国農業会議所が後継者育成を目的に進めたもので、当初は経営の役割分担や相続を中心に父子で結ばれるものを中心だった。そこへにわかに「女性」の参画が盛り込まれたのは平成になってから。全国農業会議所が平成2年度から専門委員会（座長＝宮崎俊行日本大学教授）を設けて家族協定の見直しを図った。

この動きと連動して95年には農業者年金法が改正され、農地の権利名義を持たない女性も「家族経営協定を結んでいれば」農業者年金に加入できるようになった。90年代に入り、「日本農業新聞」にも協定関連の記事が続々と登場する。

家族経営協定は、従来の「父親」＝「経営主」から脱却することが主眼。個人々が仲間として共同経営を行う（これをパートナーシップと呼ぶ）ことを目標に……中略……家族に適した協定を結ぶというもの。

（93年4月16日付日本農業新聞）

農家のオヤジは経営主を「脱却」して、  
いったい何にならねばならないのだろう。  
専制君主のように君臨するのではなく、妻  
のパートナーとして経営に当たれといっ  
ていいらしい。そんなに農家の男性という  
は妻をいじめてばかりいるのだろうか。ま  
ったくもって信用がないらしい。また、こ  
んな記事もあった。

農業後継者や女性の地位の向上を図りな  
がら経営の確立をめざした「家族経営協定」  
が今年から脚光を浴びようとしている。全  
国農業会議所が昨年に提言を掲げて以降、  
運動の盛り上がりを見せ始めているのに加  
え、農水省でも「新政策」推進に合わせ本  
格的な普及へ乗り出そうとしている。

(94年1月5日)

一見まことしやかで、非のうちどころの  
ないシステムのように思える。でも、よく  
よく見るとなんか引つかかる。

「女性の地位の向上を……」という言葉の  
裏側には、「農家の女性の地位は低い」と  
いう大前提が潜んでいる。本当にそうなの  
だろうか？ 少なくともこれまで私が出会  
ってきた人たちから、そんな空気は微塵も  
感じなかった。

みんな自分の家と仕事と家族にプライド  
を持って、賢明に生きている。だんだん  
「究極のキャリアウーマンは、農村にいる」  
というのが私の持論になっていったくらい

だ。こういう人たちを捕まえて、どうやっ  
てこれ以上「地位向上」を図れというのだ  
ろう？ 私がこよなく敬愛する農家のお母  
さんたちに、ムチャクチャ失敬ではない  
か？

「そうはいうけど、三好さん。あなたは篤  
農家とか、めぐまれた奥さんにはばかり会  
っているから……」

という声もある。百歩譲って、まだ見ぬ  
「めぐまれた奥さん」が経営協定を結べ  
ば、即「地位向上」が図れるのだろうか？

### ●女性の地位向上って？

いろいろ取材してみても、協定云々に関わ  
らず、「自分の自由になるお金がほしい」  
という思いが、農家の女性たちに根強くあ  
ったことは、事実だと思う。

Cさんは畑の隅に直売所を作って、野菜  
の売上げを自分のものにしたし、Dさんは  
仲間と一緒にヘチマ水をつくって販売。そ  
の売上げが積もり積もって海外研修まで行  
ってしまった。作業はいつも家族を気遣っ  
て夜なべ仕事だったそうだ。Eさんは共同  
加工したハムの売上げで、念願のゲストハ  
ウスを建てた——自分の努力と手腕で、報  
酬と地位を勝ち取っている。男女にかかわ  
らず、地位向上ってそういうことじゃない  
のか。空から降って来るものじゃない。

仮に経営協定を結んで「妻の報酬ウン10  
万」と明記したところで、その売上げが  
ボン！と上がるはずもなく、結局同じお

金が家の中でグルグル回っているにすぎな  
い。

「嫁に来たばかりの頃は、家計費をなんで  
これしか渡してくれないの？と不満を感じ  
たこともありました。でも帳簿を預かって  
経営全般を見るようになったら、こりゃ大  
変だ。もつと頑張つてやりくりしなくちゃ、  
と……」(Fさん)

手渡される現金が同じ額でも、それが家  
の経営の中でどういう位置付けにあるのか  
認識したとき、その人は「ただの嫁」から  
「経営者」に生まれ変わるのだ。

核家族やサラリーマン家庭と違い、農家  
には家族の関係が経営に直結する部分が多  
いし、複雑な財産管理や相続の問題なども  
発生する。Aさんがいったように「家族だ  
から曖昧にするんじゃない、明確にしてい  
くべき」こともたくさんある。行政が協定  
を結べと言ってくる前に、役割分担や報酬  
をそれぞれの納得のいく形にがつり決め  
ておけばいい(農家じゃなくてもみんな無  
意識にやっている)。

### ●大切なのは夫のデリカシー

最近、女性の取材とは別に、「オヤジ取  
材」に乗り出すようになり、こんな話を耳  
にした。

「家内が実家に帰る費用を、僕のお袋に頭  
を下げてもらっている。その姿を見て決め  
たんです。親父と経営を別にしよう」と  
(Gさん)

妻に惨めな思いはさせたくない。だった  
ら思い切つて経営を別にしてしまえとい  
うのである。それ以来Gさんは、財布を全部  
妻に預け、切り盛りを任せている。

「今、家内に逃げられたら、僕は一文なし  
ですよ」

と笑っていたけれど、こんなステキなダ  
ンナを置いて、誰が逃げるもんか。

ダンナにとつて「家」は自分の生まれた  
場所だから平気だろうが、別世界からやっ  
てきた妻が、違和感を覚えることは少な  
からずある。それを敏感に察知して改善す  
るのも、経営者の大切な資質なのだ。

なんでも家族経営協定は、「農業委員  
など、第三者の立会いのもとに結ぶのが望ま  
しい」という。家族の問題にどうして第三  
者が立ち入らねばならないのだろうか？ や  
っぱりどこかに「農家のオヤジは信用でき  
ない」という空気が漂っている。Gさんの  
ようなデリカシーがあれば「オヤジの復権」  
も夢ではないかもしれない。

家族経営協定をがっちり明文化している  
家もあれば、通帳ひとつでやりくりする家  
もあり、はたまた父子別経営にして競い合  
うケースもある。家族みんなが納得して選  
んだ方法なら、それが一番ではないか。

お宅の奥さんは、今日も元気に笑ってい  
ますか？ ダンナはゲッソリやつれていま  
せんか？ きつとそれが家族経営を診断す  
る一番のパロメーターだ。